

武蔵野日曜集会

復活のキリスト

――マルコ伝第16章1～8節――

1971年12月5日

小池辰雄

驚天動地の出来事 キリストの霊生 御霊なるキリスト 霊生の永遠的現実 彼は此処に在さず キリストは甦った 平安なんじらに在れ 霊骨・霊肉 新生はまた神生なり

【マルコ16・1～8】

1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、²一週^{はじめ}の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。³誰か我らの為に墓の入口より石を転ばすべきと語り合いしに、⁴目を挙げれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。⁵墓に入り、右の方に白き衣を著^きたる若者の坐するを見て甚く驚く。⁶若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、此処^{ここ}に在^{いま}さず。視よ、納めし処は此処なり。⁷然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処^{かしこ}にて謁^{まみ}ゆるを得ん、曾て汝らに言い給いしが如し』」⁸女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼^{おそ}れたれば一言をも人に語らざりき。

●驚天動地の出来事

こないだ、十字架のキリストのお話をいたしました。我々の信仰はもちろん十字架で終わるわけではない。

「キリストの復活がなかったならば、我々の信仰は空しい」

とパウロがコリント前書15章で言っているとおります。使徒たちも、彼らが立ち上がったのは、この復活のキリストに出会ったからです。

「キリストの復活」

と書かないで、

「復活のキリスト」

と書いたのは、もちろん、具体的な活けるキリストを相手にしていくことであるから、

「キリストが復活した」

という一つの出来事ではなくして、



「既に復活しているところのキリスト」

という重点がそこにかかるわけで、こういう題にした。しかし、とにかく、十字架にかかったあと、キリストが今度は復活するという一つの具体的事実がまず先にあるわけです。そして、それから、復活のキリストということになる。キリストの復活というところを先ず見ていかなければならないわけです。マルコ伝16章を開きます。

1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹^ぬらんとて香料を買い、2一週^{はしめ}の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。3誰か我らの為に墓の入口より石を転^{まろ}ばすべきと語り合ひしに、4目を挙ぐれば、石の既に転^{はな}ばしあるを見る。この石は甚^{はな}だ大なりき。

非常に簡潔に、しかし、ドラマチックに書いてある。何はさておき、先ずいの一番に走つていったのはマグダラのマリヤである。マルコ伝はそのことを非常にはつきりと書いてある。マタイ伝にしてもそうなんです。28章1節から見ますと、

「さて安息日おわりて一週^{ひとまわり}の初^{はじめ}の日のほの明^{あか}き頃、

安息日はもちろんユダヤの安息日です。金曜の夕方から土曜の夕方ですから、「一週の初」というのは日曜日のこと。我々のいう安息日です。けれども、実は我々の日曜は復活の日なんで、安息日はユダヤ的に言えば、むしろ土曜の方が安息日です。ヨーロッパでは、もうほとんど金曜の午後からあまり仕事をしないけれども。

マグダラのマリヤと

ここもやはり一番先に書いてある。

他のマリヤと墓を見んとて来りしに、2視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転^{まろ}ばし退^のけ、その上に坐したるなり。3その状^{さま}は電光^{いなずま}のごとく輝き、その衣は雪の如く白し。4守^{まもり}の者ども彼を懼れたれば、戦^{おの}きて死人の如くなりぬ。」(マタイ28・1～4)

私は、このマタイ伝のこの記事を見ると、単なる地震とは思わない。これは霊震です。神の霊が震動させた。普通の地震ならば、全般に響いているわけですから、またマルコ伝にも書いてあってもいいんですけれども、特にマタイ伝に天使との関わりにおいて書いてある。ローマの番兵が大勢でその岩穴に石で蓋をしたらしい。それはとても数人くらいでは動かすことのできる石ではなかったらしい。それがこういうことである。

5墓に入り、右の方に白き衣^きを着^きたる若者の坐するを見て甚^{いた}く驚く。

というのは天使のことです。マルコ伝というのはなかなか天使のことを書かないけれども、初めてここで――しかも、それは「天使」とは書かない――「若者」なんて書いてある。

6若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦^こりて、此^こ処^こに在^{いま}さず。

それはもちろん、弟子たちの中の若者でないことは分かりきってます。これは天使です。



視よ、納めし処は此処なり。⁷然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ
実に愉快な若者ですね。非常に権威がある若者です。

「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処^{かしこ}にて謁^{まみ}ゆるを得ん、曾^{かつ}て汝らに言
い給いしが如し」⁸。女等いたく驚きをのき、墓より逃げ出^{おそ}でしが、懼^{おそ}れた
れば一言をも人に語らざりき。

とにかく、この時も、あまりの出来事のために、みんな、番兵は死人のごとくにぶつ倒
れてしまうし、行った女の人たちは、驚き懼^{おの}れ戦^{おの}きというわけです。正に、驚天動地と言
いますね、天が驚き地が動く。驚天動地の出来事です。イエスという方が何と熾^{さか}んなる生
命の人であるか。

●キリストの霊生

本当の生命というものは正に霊的なものなんです。霊的でないものは生命ではない。我々
はご飯を食べたり、おみおつけを飲んだり、肉体はとにかくそれで生きてます。それもひ
とつの生命です。肉の生命。けれども、これはどうせ百歳になるかならないかで、みんな
朽ちてしまう。衰えてしまう。ところが、本当の生命は衰えない。本当の生命は正に霊が
持っている生命です。これを霊生という。あとで読みますけれども、私はかつて「曠愛文庫」
の第4号に「キリストの霊生」という詩を書いた。私たちの生命は霊生であると。

いつかも書きました。「ひと」は霊が止^{とど}まっているのを「霊止^{ひと}」という。これは大言海に
書いてある。私はこれを知ったときに本当に驚き、そして喜んだ。素晴らしいなあと思った。
霊が止^{とど}まっていなければ、ひとではない。霊止^{ひと}でないひとがたくさんいるわけだ。

今朝もテレビで、「十代と語る」とかいう番組をやっていた。もう、癪^{しゃく}にさわった。

「何をぬかすか。もっとしつかり勉強しろ。勉強もしないで、空回りで考えるなんて、

何が考えることだ」

と、まず言いたいですよ、正直。そして、「自由」というものをまず勉強してもらいたい。
昔の人たちがどういうことを、哲学者たちが本当に探究してきたか。それもやらないで
いて、なにが「自由」かと。今は、「永遠」とか、「無限」とかいうような、そういう深い豊
かな感情がない。瞬間的な現実主義です。永遠とか、無限というような情感を持たなかつ
たら、自由なんてものは出てこない。

それは何と言ったって、先生（教師）の責任なんです、小学校から大学に至るまで。先生
が本当の哲学することを教えてやらないし、方向付けないからいかん。私は小学校4年く
らいのときに、

「人間は万物の霊長である」

と聞いた。万物の霊長たるその実質と光栄とをすっかり捨ててしまったようなものだ、20
世紀の後半なんていうものは。



霊が止まっている。だから、そういうひとが本当に霊生を持っている。これが霊止^{ひと}である。あなた方は、「人」という字を「霊止」と書いたらいいよ。やっぱり、昔のひとは偉いですよ。精神的、霊的なものは昔を尋ねなければダメです。

キリストこそ正に霊止^{とど}なんです。神の霊が止^{とど}まっている霊止。「止まる」は「宿る」と同じことです。

「神の懐^{ふところ}に在^{ひたり}りし独子^{ひとりご}」

という。霊がその中に宿っている。肉体を支配している。

「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」

ではない。

「健全たる精神は健全なる肉体を支配していく。肉体を支配して健全にしていく。

健全なる肉体は健全なる心の中に包まれている。」

中心は霊である。その霊生を証したのがキリストの復活なんです。

「前のイエスが、十字架に架かって死んだと思ったが、息を吹き返した」

なんていうのではない。もつと素晴らしい霊^{からだ}体をもつて完全に霊が化体して現れてきた。体に化す。霊が体を持っていく。

●御霊なるキリスト

「受肉」というのがそうなんだ。もともとそうなんだから。「ロゴス」なる霊的キリストが――「キリスト」というのは霊界のロゴスとして存在していた。アブラハムよりも先に神と共にあったところのキリストが――ナザレのイエスとして地上にやってきた。

大体、「復活のキリスト」なんていう言葉は本当は意味をなさないんだ。もともと、キリストはキリストで、永遠のキリストなんです。現象面でただ変わっただけのはなしです。現象面でナザレのイエスとなり、そして今度は、新しくイエスが復活したような姿で出てきた。けれども、本来はそれはみんなキリストなんです。

キリストがイエスとして受肉している。肉を受けているんだから、肉を受けている本体は何かというと、霊なんだ。

「受肉のキリスト」

なんていうけれども、ナザレのイエスは霊が中心に動いているところの、もう既に霊体的な人物なんだ。けれども、もちろん我々と同じ肉を備えていらっしやる。だから、一切の感情を持っている。弱さをまた、どん底まで持っている。その弱さを持っているけれども、弱さの中に強さがある。霊という強さが。

この霊がいつも言っている。何を言っているかという、

「汝の聖意をなさせたまえ。どうぞ、この私を通して、やっってください」

と言っている。そして、神の霊がしょっちゅうこのキリストの霊に展開しているわけです。



そして、我々の人間の弱きに勝って、我々を救いへともっていく、贖いの実質を備えておられる。

我々は、なるほど、死に至るまで罪びとですよ。けれども、その中にこの霊なるキリストが――これは要するに御霊です――御霊なるキリストが在る限り、どんなに滑つても転んでも躓いても、必ず勝っていく。必ず前進していく。だから、私は絶望を持たない。あなた方もそう。普通なら、

「絶望、失望、お終いはやけくそ」

なんていうことになる。そのやけくそがなくなってしまう、どんなことがあつても、御霊が在るならば。「信仰」ではないですよ。

「御霊がなければ、クリスチャンでない」

とパウロがはつきりと言っているんだ。それ以前の、御霊が来る前のペテロは――まずキリストの横にいたから非常にその感化を受けていたけれども、いわゆる感化だよね――けれども、滑ったり転んだり、それはどうにもならん。ところが、御霊が来たらば、イエスは天界にいらつしやつても、もう直々の世界です。

●霊生の永遠的現実

イエスは正に、霊が止まっている霊止で、霊生を持つておられたから、十字架の贖罪の大業を果たしたらば、この霊生が現象せざるを得ない。霊生の現象を、ただ「復活」と言っているだけの話です。霊生がそこにはつきりとまた顕現してきたわけです。

ところが、みんなキリストの霊生が分からないんだ、イエスというひとはそれほどの素晴らしい霊止だということを、イエスが地上にいた時に、みんな一緒にご飯を食べたり一緒に歩いたりした時に、それが分からない。見えない。見るとも見えず、聞けども聞こえず。聞いていても、中身が分からない。

「しかし、今にお前たちは私の言ったりしたりしたことが分かる時がくるよ、

御霊が来れば」

と、キリストは言っておられる。だから、聖書は、御霊が来なければ、いくら聖書を研究したってダメです。聖書研究会なんてものは何年続けたってダメですよ、御霊が来ない限り。もうこれははつきり、権威をもつて言います。

だから、私たちが御霊をいただいて、この福音書を読むと、何と素晴らしい現実だろうか。読むことが直ちに生命となり、読むことが直ちに祈りとなる。あなた方は祈るときに――瞑想の祈りもいいよ、私ももちろん闇の中で瞑想して目をつぶって祈るけれども――福音書を開いて、グーッと読みながら、直ちにそれが祈りであるという境地。読みながら、どんどんその世界に入っていく。それができなかったらば、まだ本当の御霊の世界ではない。もう、そこらのキリスト教とは違うんですからね、皆さん。



「この頃、無教会の先生方のものを読んでいます」

なんて、ある人から言ってきたけれども、何をぬかすかと。それはまあいいですよ。けれども、せっかく私の話を聞いてから、今ごろ

「無教会の先生のものを読んでいます」

なんて。早く卒業してくれなければ。私ははつきり言いますよ、何も遠慮なしに。内村先生でも、藤井先生でも、もちろん火花の散っているところがあります。けれども、この使徒たちの次元からはズレている。

皆さんは、キリストの霊生の永遠的現実の世界ですから。あなた方はもう、そういう境地に来ている。だから、私は君たちの将来を期して待っているんだ。生まれつきの才能や性格は、いいですよ、どうでも。もう一番根底の大事なことはキリストですから。この霊なるキリストの生命です。甦りのキリストにぶつかったら、私はもうやりきれんです、本当の生命がくるから。

これは、驚き怪しんだらダメです、驚き喜ばなくてはダメ。これはまだみんな怪しんでいる。弟子たちもまだダメなんだ。聖霊が来るまではダメなんだ。だから、一番最後に、昇天のキリストが、

「祈って待っている。今にくるぞ」

と言われた。

天使が現れて

「驚くな」

と言った。マリヤだつて初めは、キリストが生まれる時だつてそうなんだ。みんな霊的な次元に対しては、驚き怪しむんだよ。

●彼は此処に在さず

ルカ伝24章の始めの方から少し行きます。

「一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。²然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、³内に入りたるに主イエスの屍體^{しかばね}を見ず、⁴これが為に狼狽^{うろた}えおりしに、

キリストは当然死んでいるものと思っていた。ところが、いなかったもので、うろたえたという。いなかったら、うろたえてしまったりして、これは全然ダメです。

視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍ら^{かたわ}に立てり。⁵女たち懼^{おそ}れて面を地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか、

はつきりしますね。

「なんで死んだものの中に生ける者を尋ぬるか。キリストは生きてゐるぞ」



と。ゲエテさんも言ったでしょ。

「我々はこの地上の生涯が終わったら、大自然が次の存在の形態を与えてくれると私は信じている」

と、74歳くらいのゲエテがそう言っている。ゲエテという人はそういう大きな、次の世界の生というものをちゃんと信じてかかっている。ゲエテはキリストだって、ちゃんと掴んでいきますからね。あとで、『ファウスト』の「キリストは甦った」というところを読んでもいいけれども。

「生きている」と、これは天使がはつきり言った。

6 彼は此処に在さず、甦えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。

忘れてしまっているんだ、みんな。大体、空耳で聞いているからね。想い出そうとしたって、想い出せない。

「あつ、そんなことをおっしゃったかね」

なんて。

7 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり。」

と、三度おっしゃった。三度まで言われたのに、それを、まさか忘れはしなかっただろうけれども、やっぱり本当に受けとっていないわけだね。受けとっていないから、

「キリストは甦った」

と言つても――

「やっぱり、そうか。キリストはうそをつきはしないんだから」

と言うかと思うと――ところが、

「やっぱり、そうか」

とこないんだからね、いつまでたつても。何か新しくぶつかったようなことみたいに。「甦るべし」は

「甦らざるを得ない」

ということですよ。

8 ここに彼らその御言を憶い出で、⁹墓より帰りて、¹⁰凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。

一番先にいつも、「マグダラのマリヤ」が書いてある。

11 使徒たちは其の言を妄語たわごとと思ひて、信ぜず。

聞いているんですよ。聞いているながら、まだ「妄語と思つて信じない」というわけですから。



¹²ペテロは起きて墓に走りゆき、^{かが}屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰れり。」(ルカ 24・1～12)

まあ、正直に書いてあつていいですよ、聖書は。あまり飾られては困る。

そして、マルコ伝 16 章 9 節からいくと、

⁹ ^{ひとまわりはじめ}一週^{あかつき}の首の日の払暁、

^{なま}前にイエスが七つの悪鬼を逐いだし給いし女なり。

ということが書いてある。

●キリストは甦った

あのゲエテの『ファウスト』の句に、

「朽ちゆく胎から、

キリストは甦った。

この地の世界はみな朽ちる。すべてのものが滅びゆく、朽ちてゆく。そういった「滅びの懷の中から」というのは、「大地の中から」ということ。

諸々の絆^{きずな}から、

喜んでお前たちは自分たちを解き放せ。

一切の束縛から解き放せというのは、キリストの生命が初めて我々に本当の自由を与えるのであつて、キリストのこの永遠の生命にぶつからないでいて、「自由」なんて言つたつてダメです。空回りしてしまう。あなた方は、言うべきときには、はっきり言わなくてはダメですよ。私たちの信仰は絶対に観念でないから。一番現実中の現実です。

活動をもつて彼を誉め讃える人

即ち、働くことが讃美である。私たちは、いわゆるアクセサリー信仰ではどうにもならん、このキリストの実力を持つていなければならぬ。霊生の実力をもつて、霊生は人を担い上げる生命ですから。担い上げの生命ですから。それを愛という。感情的な愛ではない。担い上げの生命というものをもつて対していく。

「クリスチャンは自主で何者にも隷属しない。しかしながら、一切の者に隷属する」

とパウロもルターも言つたのは、「隷属」という言葉が躓きになるけれども、「仕える」ということです。仕えるということは、逆に言う、「担う」ということです。もつと力強い言葉でいうと、「仕える、奉仕する」ということは、「担う」ということなんです。集会でもそうでしょ。黙つて、どしどし自分でもつて進んでいろんなことをやつている人は、その集会を担っている人なんです。そういう担いの態勢、これが人を打つ。言葉ではない。

キリストの生命がくれば、一晩くらい寝なくなつて、祈つてごらんさいよ、力が来るから。

「どうも今日は睡眠不足で、今日は何時間しか寝ないから、明日はそれをプラスして何時間寝ようか」



なんてダメだよ、そんなのは(笑)。電車の中でもどこでも、5分でも10分でもグツと寝れる。もつと自由にならなければダメですよ。ドイツ語の言葉に

「始めに働いて、それから遊ぶ」

という言葉がある。今日は始めに遊んでしまつたら、後から働いたらいい。それだけの気魄をもたなくては。この御霊の世界になると、柔軟で自在な人になる。キリストの生命というのは何と素晴らしいか。何もないときには、水だけを飲んでいけば大丈夫ですよ。

「水だけでは栄養がどれだけ足りなくなる」

なんて、そんなことではない。もちろん、水ばかり飲んで、一生それでいくわけにはいきませんよ。けれども、時に臨んで、それだけの自由な――水を葡萄酒に変えるようなキリストだから――水を飲みながらキリストを念じていれば、腹の中でそれが凄い力になってくる。それくらいのことを時々、経験していかななくてはね。

あなた方はいつか無銭旅行をやつたでしょ。あれでかなり経験したでしょ。なにも、妙なことをしょっちゅうやつてろなんて言っているのではない(笑)。しかし、行き詰まる時に行き詰まらない人になってください。いわゆる計算なんかしなくたって大丈夫ですから。

キリストの愛を証しする人、

兄弟のよしみをもって食を分かち、

リングが一つあつたら、

「さあ、君、ひとつを分けて食べよう」

と言って、お互いに分けて食べる。これは一つ分しかないから、お前にやるわけにいかんなんていうのはダメだ。分けて半分ずつ食べると、かえって楽しい。

宣教しながら旅をし、

喜びを約束しながら行くような、

そついった人たちに

このお師匠さん(キリスト)は近くにおるぞ。

彼はそこに在る。」

「キリストが近くににいるのは、そのような身証する人たちに近いのだぞ。身をもつて証しする人たちに、そついった人たちに近いのである」

ということです。私は、『ファウスト』のこの句は非常に好きなんです。

●平安なんじらに在れ

今度は、ルカ伝24章13節から35節まで、「エマオ途上」のことが書いてある。旅をしているエマオ途上の二人に、もう一人、知らない人が現れてきて会話を始めた。

「あなた方は悲しげな顔をしているが、どうしたんだね」

「お前は、エルサレムに宿つて、この頃起こった事を知らないのか」



「どんな事だね」
「ナザレのイエスのことだ」と。

「19……ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて業にも言にも能力^{ちから}ある預言者なりしに、20祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之^{わた}を付し遂に十字架につけたり。21我等はイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり。

大体、「贖うべき者」と言ったつて、贖いの意味が全然分かっていないからね、こういうことを言っている。全く現世的な意味の贖いのことを言っている。

然のみならず此の事の有りしより、今日ははや三日めなるが、……

と、ずっと語った。そうしたら、それを聞いていたイエスは、

ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。

26キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや。」(ルカ

24・19～26)

と、逆にやつつけた。いくら^{うわき}噂をしていても、上の空の噂です。ところが、イエスはズバリと言われた。自分がこの甦りのキリストですから。

「愚かにして」

というのは、

「不信にして」

ということ、頭が悪いという意味ではない。不信にして心鈍き者よと。一向に受けとれない。聖書読みの聖書知らずが、たくさんクリスチャンの中にいるわけだ。これがキリストにこういうようにやられるわけだ。

「ああ愚かにして心鈍き者よ」

と。

「心鈍き学者どもよ」

なんて言われて、学者がやられる。神学者がやられる。

それで、食事をして、パンを裂いたところが、その時に彼らの目が開かれて、イエスであることが分かった。その瞬間にキリストは消えてしまった。彼らが驚いて、イエスに目を見張っている姿は、「曠愛新書」第6号の表紙に印刷したレンブランドの絵がよく表している。レンブランドはあの後で、キリストが居ないのを、光だけが来ているのを描いている。あれはおもしろい。光だけで、キリストが見えなくなつて、その二人がそこにしょんぼりしているのを描いている。

「32かれら互いに言う『途^{みち}にて我らと語り我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33斯て直ちに立ちエルサレムに帰り見れば、



十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うに
よりてイエスを認めし事とを述べ。

そうすると今度は、そこへキリストが入ってきた。

³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言
い給う。(ルカ 24・32～36)

このときに、「平安」と訳したのは大変結構なことです。「平和」と訳してはいかん。ルカ
伝 2 章の、

「いと高き所には栄光、神にあれ。地には平和(平安)、主の喜び給う人にあれ」
(ルカ 2・14)

これは「平和」ではなく、「平安」と訳さなければいかん。私はそのことにしばらく気が
つかなかった。けれども、あれは「平安」と訳さなければいかん。キリストが現れたんだから、
このキリストとの交わりが本当に平安を与える。これは「平和」でない。「平安」です。日
本語はここではつきりと言ひ換えなくてはいかん。平安があるところに初めて人間の間の
平和がある。

「汝のうちに安らうまでは安きをえず」

というこの「安き」は平安です。

皆さん、いろいろな問題があるでしょう。就職問題、結婚問題。あなた方としては何と
しても、もうこのキリストとの縦の平安、これがなかったならば、どんなに良きそうにみ
えてもダメです。これがあれば、どんなにそれが危険のようにみえても、乗り切っていく。
それだけは、我々の魂の世界はごまかしがきかんですから、自分ではつきりわかる。

●霊骨・霊肉

「³⁷かれら怖じ懼れて見る所のものを霊ならんと思ひしに、³⁸イエス言い給う
『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、

戸が閉まっているのに、イエスが入って来たからね。

³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、⁴⁰斯く言いて手と足を
示し給う。

マグダラのマリヤがキリストに触ろうとしたら、触るなと一遍おっしゃった。今度は、触
つてみるという。

霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』(ルカ 24・37～40)

まあ、驚くべき言葉です。「霊には肉と骨となし」で、私はすぐ来る言葉がある。

「汝はわが骨の骨、わが肉の肉なり」(創世記 2・23)

という言葉です。この「肉と骨」は、イエスがかつて持っていたところの「肉と骨」とは



違う。これは滅びない骨であり、滅びない肉なんです。我々のこの肉体はいつか滅びます。けれども、キリストの、今示したところの骨と肉は霊骨、霊肉なんです。

パウロがコリント前書15章で

「血気の体あり、霊の体あり」（コリント前15・44）

と言ったでしょ。あの「霊の体」をもってキリストは現れてきた。

牧師さんや神学者がこれに躓くんです。

「こんなことを書いてあるが、これは神話だ」

なんて。私は、或る聖書学研究会——今の叢々たる一流の学者の群です——そこに私はいたけれども、みんなが笑ったから、

「もう、私はあなた方の群から出る」

と言って出てしまった。本当だよ。私はその点では絶対に使徒の角度にいきますからね。学者が何だというんだ。

そういう霊骨霊肉をもってイエスは現れた。キリストにしがみついてくださいよ。このイエス・キリストの霊肉霊骨をもって、

「このようにして変幻自在だぞ。幽霊ではないぞ」

と。霊界にこの霊肉霊骨をもちながら、彼は天界にまた昇ってしまう。我々の一切の判断を超越したところの驚くべき実在ですから。

「この実在がもし、ないならば、私たちの信仰は空しい」

とパウロが言った。

「いかにもして甦らんがために」

と、パウロが幾度も言っているではないですか。ヨハネ黙示録を見ても、そうです。あきら諦めの世界ではない。どこまでも、イエス・キリストの生命をもって、この霊骨霊肉をもって、私たちは

「汝イエス・キリスト、主さま。あなたは私の骨の骨、肉の肉、霊の霊である」

と、これは本当に言えなくてはいかん。そうしたらもう、天下無敵ですよ。泥の、土の器の私の中に、この燃えているところの、本当にキリストの生きているところの、これが現実なんです。だから、誰が何と言おうと、私は絶対に全世界を相手にしても、この信仰からはズレるわけにいかん。

この霊骨霊肉の、

「これわが骨なり、肉なり」

とイエスが言われた、実にこれこそが私たちの信仰のもの凄いひとつの根拠であると言ってもいいものを、それを笑われたら、そんな群にいるわけにいかんですよ。

「キリストはわが骨の骨、肉の肉、わが霊の霊なり」

という、霊的な最もそれ自身が永遠の質を持ったところの事態。



「血気の体あり、霊の体あり」

という、その霊の体が既に来ているんです、内的に。死んでから先ではない。既に来ている。だから、

「原子爆弾が爆発しようが、水素爆弾が爆発しようが、どつこい、この生命は死にませんよ」

と言うわけです、肉体は散るでしょうが。私みたいなおよそいわゆる霊的でない人間が、どうしてこんなことになったか自分で不思議でしょうがない。何も私は無理しているのではない。本当なんです、これは。

●新生はまた神生なり

それだから、

「そこに何か食べるものがあるか」

と言ったら、

「⁴¹かれら^{ようこび}歡喜の余に^{あまり}信ぜずして怪しめる時、イエス言い給う『此処に何か食物あるか』⁴²かれら^{あぶ}炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前に^し給えり。」(ルカ 24・41～43)

これは嘘^{うそ}ごとですか。聖書にこんな嘘^{うそ}ごとを書いていいんですか。これをみんな笑ったんだ。こういう現実^{現実}は人間の一切の科学を逆に笑っているわけです。

ゲーテも『ファウスト』の中で言っているではないですか。

「諸々の科学をやってみたけれども、私は何も知らないということが分かったと言
うよりか仕方がない」

と。世の中のことはすべて神秘です。

「いかに？」

ということとは或る程度までは分かります。けれども、

「何故に？」

となったら、もうこれは分からん。

「万事は不可解」

と言うのが本当だよ。これは神秘です。神が秘めて置かれ給う。

「神秘」

とは、言葉の本来の意味では、神が秘めて置かれることです。それは最後の日に、新天新地の最後の日に明かされる。

だから、「神の幕屋」の最後の日のことをとにかく主題にして、私は生きているんだ。

「⁴⁴また言い給う『これらの事は我が^{とも}お汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる^{すべ}凡ての事は、必ず遂げら



るべしと言ひし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて
言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の
中より甦^{かつ}えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦^{ゆるし}を得さる悔^{くいあらため}改はエルサレムよ
り始まりて、もろもろの国人に宣^{のべ}伝えらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証
人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力^{ちから}
を著^きせらるるまでは都に留れ』(ルカ24・44～49)

「御霊の力をきせられるまでは都に留まってい。集まって、しっかり祈って
いろ。そうしたら、変わるぞ」

という約束をされて行かれてしまった。ルカ伝のここところは非常に大事です。エマオ
途上の二人と遭ったところよりか、後の方が大事です。

私たちにとっては、この正に甦^{かつ}りのキリスト、即ち霊生のキリストが私たちの信仰の現
実のすべてなんです。甦^{かつ}りのキリストと共に私たちは甦^{かつ}りの生命に与かっている。新生に
あずかっている。新しい生命に。

「人、新たに生まれずば、天国人にはなれませんよ」

とキリストが言われる。新生はまた神^{かみ}生なりという。神の生命です。

どうぞ、皆さん、いろいろな相対的な問題や現実でもって――顔を見ていると分かるん
だよ――

「ああ、何か少し雲がかかっているな」

と。まあ、それはいいさ。けれども、もうひとつ奥で、もう少し見ていると、

「ああ、やっぱり底光があるな」

と、そういう人になつてくたさいよ。雲を貫いて、そこから日の光が射しているような人
にね。運命環境はどう変わったって、いつもそれはケリがつかない。運命環境如何にか
わらない。

水をコップに入れると、コップは丸いから、水は丸くなっていく。これをずっと入れて
いくと、今に溢れる。器に、運命環境に従いながら、溢れていくような人にならなければ
ダメです。自由というと、すぐぶつ壊すようなことを言っているけれども、そうではない
んだ。そこに従いながら、そこに溢れていく。

そこで、「キリストの霊生」という詩を読んでもみます。(割愛。小池辰雄著作集第八巻『詩歌集』
127～136参照)

